

# ADG アクティビズムと芸術+ワークショップ

## 社会彫刻としてのADG

### ADG(アナーキストドラムギャザリング)のためのテキスト



#### 【近代と現代】

「現代文明の世界は非常に不公平に分配された物質的な繁栄を獲得しようとして、民衆の芸術を全く抑圧してしまっただけのことである。言葉を換えていうならば、民衆の大部分は芸術に参与していないのだ。(…)これだけでなく、もっと悪いことがある。民衆のために民衆によってつくられた芸術をなくしてしまったために、彼らは労働に本来あるべき慰安をうしなってしまったということだ。それは彼らが昔は持っていた慰安であり、今後も常に持つべき慰安である。それは労働自体の力で自分の思想を同胞に伝える機会に接する喜びにほかならぬ」  
ウィリアム・モリス「芸術と社会主義」

「Q: 芸術家がお金によって墮落しないようにするにはどうしたらよいのですか?  
A: 現在の芸術は資本主義社会の中で貨幣によって乱用され、多くの若い人々に誘惑的に働いています。(…)私から忠告させてもらえば、現在の体制を変えなければならぬということです。そのためにわれわれは、お互いにむすびつき、連帯しなければなりません。そのために多くの人々、多くのグループを集めなければなりません。そして今とは違ったことをしなければなりません。ただ選挙によって何らかの政党を選び、それによって現在の体制を結果的に擁護するということでは駄目なのです。逆にまったく直接的で民主主義的な工作をしなければなりません。」  
ヨーゼフ・ボイス「対話集」

「市場は、市場の力は、ありとあらゆる潜勢力を呑み込み、それらの潜勢力が特異なものになる可能性を、それらが誰かまたは何かにとって価値を持つ可能性を、奪い去る。それらが生産する可能性を奪い去る。創造性は抜き取られる。市場という大きな循環装置が、主観性(主体性)の無を生産している。尺度も希望もなく、方向もリズムも失って、発狂しつづけるメーゴーラウンドは回転し続けているんだからね。これ以上ないほど凄まじいザッピングで、千ものチャンネルを次々と映しだすテレビ画面のようだよ。イメージが破壊されるばかりでなく、想像力も破壊される。もはや記憶もない。」  
アントニオ・ネグリ「ポスト近代について」

#### 【00年代の新しい反資本主義】

「新しい反資本主義と伝統的な左翼の最も大きな違いの一つは、定義するのが非常に難しく、それはまだどの本にも書かれてないし、また、どんな理論にもあてはまらないが、強いというなら、その違いは「闘いの文化」の違いである。」

【伝統的左翼】	【新しい反資本主義】
【闘いの文化】	【創造の文化】
大儀のための「犠牲」を評価する	充実して幸福な人生を築くことを大切に
個人の利益は集団的な利益に吸収される	個人的な利益は集団的な利益に含まれ受け入れられる
疑いやためらいは罰せられる	知らないことを生活の基本として認める
私生活はほったらかし	私生活は重要である
弱さ、間違いに対する不寛容	人間誰しもあやまちを犯す
結果を考えない勇気を評価する	細心さをともなった大胆さを評価
死者を「英雄」や「犠牲者」として祀りあげる	生命をたえ、日々の暮らしに根ざした闘いを実践する人びとを礼賛する
一般人の世界から切り離された闘士たち	社会にとけこむ闘士たち
厳格な規律	状況に応じて合意する
「怒れる」闘士たち	「陽気な」闘士たち

「新しい反資本主義のこれまでの運動との違いは、まるでお祭りやカーニバルのようなアピールの形式、警察の弾圧をかすため「どげた戦略」(道化師の格好をするとか花を配るとか)の採用をみれば明らかだ。「新しい闘いの文化」は、アートと政治の密接な関わりにおいて見てとることができる。「伝統的な闘いの文化」の闘士たちの活動においては、芸術が採用される場面はごく限られていた。よくてせいぜい「アクセサリー」あつかいだった。しかし、新しい世界をいまここでつくることがアクティビストたちの主要な課題となってからは、新しい反資本主義とアーティストの仕事はかつてないほど近づいてきている。いまやアーティストとアクティビストは互いに創造性を分かち合っているのだ。」  
エセキエル・アダモフスキー「伝統的左翼と新しい反資本主義」

まず叫びがあった。あなたは覚えてるだろうか？おそろしくきつかけになるのは、街路に響くマーチングバンドのリズムである。スティーヴン・シカイティス

【70年代のアナーキストドラムギャザリング】  
「1960年代、わたしたちの多くはサンダー・ドラマーでした。わたしたちは、ドラムの持つパワーや神秘性、意識の覚醒に魅せられて、目の前にあったドラムの世界にはいっていったのです。アナーキスト・ドラムサークルで、わたしたちは知らぬが仏という感じで、リズムの海を舵も持たずに渡るうとしていました。私たちは自分たちがどれほど無知であるかをまったく知らずに、また誰もそんなことを気にかけていませんでした。当時、ドラムにふれる方法は、これらのアナーキスト・ドラムサークルまたはサンダー・ドラム・サークルしかありませんでした。このタイプのドラムサークルは、レインボー・ギャザリングにおける恒例のイベントとして、人気を得ていきました。毎年、何千人もの人びとが、アメリカの効率公園の森のなかで(毎年7月初旬に)開かれるレインボー・ギャザリングのために集まりました。そこで一週間のあいだ、参加者はおたがいがいや地球との平和と調和のとれた関係を保ちながら生活し、来たときよりも帰る時のほうがきれいになるほど環境美化に動いたものです。そこで開かれるドラムサークルでは、何百人という数の人びとが参加し、毎日夜おでドラムの音が続くことも珍しくありませんでした。この種のサークルには、誰でも自分のリズムスピリットを自由に表現することができ、誰からリーダーや先生になつたりしない、という無言のルールがあります。まさにアナーキズムです。人びとは暗黙の了解のうちに、合意点を探ってゆきます。もしもアナーキスト・ドラムサークルで、みんなで同じパルスを基本にしてやってみないかい?」といったとしたら、「ルールなしがルール!」のグループにルールをおしつけようとしていると解釈されてしまいます。アナーキストドラムサークルでのファシリテートは不可能ではありませんが、あくまでも極力さりげなく、最も基本的な方法した適さないでしょう。私はアナーキスト・ドラマーが形式にとらわれず、自由にドラミングスピリットを解き放つときの、彼らが「知らずに知っている」ほどばりから出るスピリットを尊重しています。それと同時に、古い文化や伝統が私たちに与えてくれるガイダンスや教習、テクニクにも深い敬意を抱いています。  
アーサー・ハル「ドラム・サークル・スピリット」

#### 【00年代の新しいアナーキズム】

「北米では、ヨーロッパと同様に、マルクス主義者と初期のアナーキストグループが「多数決」を主に用いた。しかしアナーキストとのグループの多くでは、提案に反対票を投じた者は評決の結果に束縛されることはないと考えていた。アメリカでは、ソサイエティー・オブ・フレンズが非常に初期の段階から「合意形成」による意思決定を行っていた。クエーカー教徒は非常に初期の段階から1950~1960年代の平和運動にいたるまで活発な社会運動を行なったが、多くの場合、他のグループに彼らの形式化された「合意形成」を伝えることはなかった。1970年代に現代的な「合意形成」の方法が生まれ、はじめてこの状況に変化が生じた。急進的なクエーカー教徒が、形式化された「合意形成」のトレーニングを提供しはじめ、1970年代の終わりから1980年代初頭にかけての反核運動の直接行動を指向するグループの形成においてカギとなる役割を果たした。このときはじめてアメリカで、形式化された「合意形成」「アフィニティ・グループ」「スポーク会議」などの、いまやおなじみとなっているパーツが全て出揃うことになった。結果は、戦術的なレベルにおいて、目を見はるような成功を示した。「合意形成」による意志形成は、この10年で世界中にひろがった。ヨーロッパの直接行動を指向するグループは、少なくとも2001年のブラハのIMF抗議行動以来、アメリカ型の意志決定の進行方法を多く採用するようになった。」  
デヴィッド・グレーバー「合意形成の歴史」

#### 【合意形成会議のファシリテーター】

「ファシリテーターには、会合を導き、グループが決断するのを助けるため、一時的な権威が与えられている。このためファシリテーターという役割は可能な限り、交代されなくてはならない。ファシリテーターは、注意深く、積極的に人の意見に耳とかたむけること。ファシリテーターは、グループが意志決定する際の仲介者である。ファシリテーターは議論がどこに向かっているかに耳をかたむけ、議論が到達点に達するように手伝わなくてはならない。同時にファシリテーターは、個々人の立場や思いを認識し、敏感に感じるよにすることが必要である。」  
ロック・ダブ・コレクティブ「合意形成、その促進、そして解放」

はじめに群れがあった。いま、わたしたちは分断されている。あなたは気づいてるだろうか？寛容さを持った、群れになれ。イェル・コモンズ